

学生が担う地域活動 ～若さと知恵による地域との協働～

中央学院大学 坂井ゼミ 3 年②

齊藤 壮 加藤 恵菜 鎌手 真尋 星野 士郎 岡部 遼

1 はじめに ～新しい「自治の担い手」の必要性～

自治の担い手は、必ずしも地域住民だけではないのかもしれない。通常、自治といえば「自らのことを自らで処理すること」を指す。その具体的な意味合いと担い手は様々だが、地域の人々はその町の保全や発展、課題に取り組むことが通例であろう。「町内会」や「自治会」といった地域住民による組織は、まさにその担い手であった。しかしながら、既存の地域住民による自治だけでは、その活動に限界が生じているようである。

昨年 3 月、総務省は「令和 3 年度地域運営組織の形成及び持続的な運営に関する調査研究事業報告書」⁽¹⁾ を発表した。これは、地域住民によって形成された地域課題の解決をめざす取組を持続的に実践する組織である「地域運営組織」について総務省が調査研究を行ったものである。中でも特筆すべきは、全国 6,064 団体の地域運営組織に対して行われたアンケートにおける、「持続的運営に向けた課題」(図 1) という設問の回答状況だ。これによると、「活動の担い手となる人材の不足」を訴えた割合は 84.5% にまで達していた。さらに回答の割合が高い項目を見ると、「次のリーダーとなる人材の不足」が 59.3%、「団体の役員・スタッフの高齢化」が 45.8% となっており、人材不足が大きな課題であることが示唆されていた。

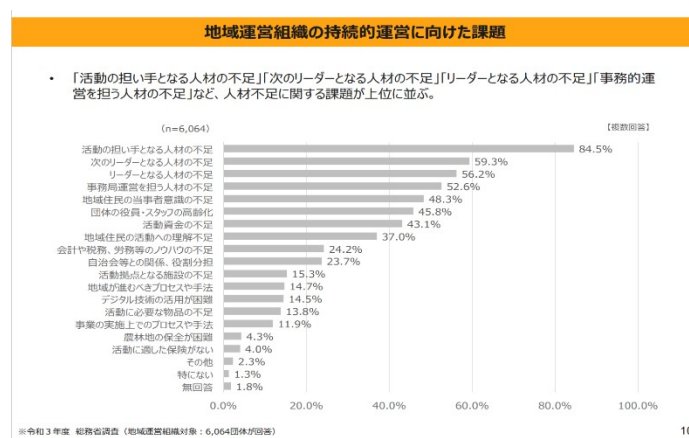


図 1 地域運営組織の持続的運営に向けた課題についての回答状況（〔1〕より）

この課題については、地域おこし協力隊の協力や UI ターン者の起用など様々なアプローチがなされているが、根本的な解決に寄与しているとは言い難い。少子高齢化に拍車がかかっている今日の社会情勢も鑑みれば、地域運営はいずれ衰退する恐れがある。

そこで、我々坂井ゼミは学生を地域運動活性化の担い手とするべく、「地域連携カイギ」という学生サークルを創設した。これによって、地域と学生の架け橋を作り、地域の活性化や課題の解決に役立てることを試みた。本稿では、学生サークルから成る地域活動組織が地域活動の新たな担い手となることを、本学の位置する千葉県我孫子市における既存の担い手である「我孫子北口まちづくり協議会」や「我孫子市 100 人カイギ」との連携を通じて明らかにしていく。

2 なぜ「学生が地域活動を担う」のか

なぜ学生が地域活動を担うのか。それは、学生自らが「自治の担い手」として編成した組織は、既存の地域団体や組織とは大きく違う特性を持っているからである。その特性とは、「若い人々が、多くの知的財産を保有する「大学」という機関に所属している」ということである。堂目は『やっかいな問題はみんなで解く』⁽²⁾において、社会課題の解決に有用なのは自然科学の知のみならず、人文学や社会科学、さらにはそれらの専門知をどのように使うかを考えるための教養が必要であると指摘している。大学は研究機関であり、数多の知的財産が備わっているだけでなく、研究者や学生がそれを継承し活用することができることから指摘だと考えられる。

また、大学では毎年学生が卒業し、新たに学生が入学してくるため、若い人材が継続的に確保できる。そのため、サークルや部活動、学生団体などが高齢化しない。これは、前掲の「次のリーダーとなる人材の不足」や「団体役員・スタッフの高齢化」という課題を解決できる可能性を有している。

さらに、須賀は「地域活性と持続可能な大学と地域の連携」⁽³⁾の中で、大学地域連携活動の持続可能性について、学生によるフィールドワークの結果から地域と大学が良好な関係性を保ち、発展的な展開を誘発させる可能性の一つとして「共創コミュニティの要に学生がなる」ことを挙げている。既存の地域活動を担う団体や自治体、地元の学校などを様々な自治の担い手と協働し、地域を活性化させる活動を行うためのプラットフォームを学生が担えば、豊かなまちづくりに貢献できるであろう。

これらのことから、既存の地域団体や組織の他に、学生が地域活動の担い手になることは、大いに意義があるといえるだろう。我々はこれを実践するため、学生自らが主体となって地域活動に取り組み、それによって大学と地域との架け橋となり、地域コミュニティの活性化や課題の解決を図ることを目的としたサークル「地域連携カイギ」を創設した。2023年12月現在、そのサークル創設から半年弱が経過し、2つの活動実績が築き上げら

れた。1つは、地域の人々のつながりを作ることを目的としたコミュニティ活動である「我孫子市 100 人カイギ」との協働による、100 人カイギの学内開催である。もう1つは、我孫子駅北口の周辺の美化活動を通じてまちづくりに取り組む「我孫子北口美化委員会」との協働による、「我孫子北口ふれあいマルシェ」の企画・実施である。ここからは、学生がこれら既存の担い手たちとどのように連携・協働し、どんな成果が得られたのかを述べていく。

3 新たな担い手と地域の協働

(1) 「我孫子市 100 人カイギ」との協働

創設されたばかりの地域連携カイギが機能するには、まず我孫子市という地域にどのような活動をしている人がいるのかを知り、繋がりをつくる必要があった。なぜなら、その地域の人々に関心を持っていなければ、その地域の課題に対してどのようにアプローチすべきなのかわからないからである。

そこで我々は「100 人カイギ」という取り組みに着目した。100 人カイギは、地域で働く 100 人の話を起点に、クロスジャンルで人々のつながりを生むことを目的としたプロジェクトである。毎月 5 人のゲストスピーカーを迎えて講演を行い、ゲストが 100 人に達したらコミュニティは解散される。この取り組みは全国で行われており、我孫子市 100 人カイギでは「知る・つながる・創る」をモットーに、我孫子市で「暮らす」「働く」「学ぶ」「地域活動」に関わりのあるゲストが地域のあるべき姿や日頃の活動について語る。また、講演の参加者同士でアイスブレイクや名刺交換を行う時間が設けられ、懇親会も開かれるなど、人との繋がりを作ることでできる環境が整えられている。この「我孫子市 100 人カイギ」の実施グループとの協働は、地域の自治の新しい担い手とのコラボレーションの可能性を開拓した意味をもつ。

「我孫子市 100 人カイギ」のキュレーター（主催者）を務めているのは地域の若手経営者のグループであり、彼らは、まちづくり協議会（自治会を中心とした組織）、青年会議所（若手指導者）、商工会（事業・経営）といった古くからある地域の自治の担い手とは異なり肩書きや年齢を問わない地域の新たな担い手である。このコミュニティを通じて、学生が地域の新しい自治の担い手と協働できることが示された。実際に参加すると、農家や市役所の職員、トライアスロンの事務局長などに関わりを持つことができ、幅広いボランティア活動への参加や後述のサークル主催イベントの開催に繋げることができた。

後日、我孫子市 100 人カイギの主催者グループから、本学の大学祭でこれを実施してはどうかという提案を頂いた。我々はこれを機に、学生と地域住民が繋がりを持つことによって地域の発展のきっかけづくりをしていきたいと考え、学園祭での開催準備に着手

した。登壇者には、地域連携カイギの中心メンバーや本学の教員のほか、我孫子市の不動産会社で働く本学の卒業生や、街づくりや教育に取り組むイラストレーター、健康生きがいづくりアドバイザー協議会の代表を選定し、当日はそれぞれの視点から地域社会への取り組みや思いが語られた。あと数年で社会人になる学生にとっては、実際に社会に出て働いている人と話をすることで将来のロールモデルが想像でき、地域住民にとっては本学の学生が地域活動の担い手としてどのように取り組んでいるかを伝えることができたように思われる。

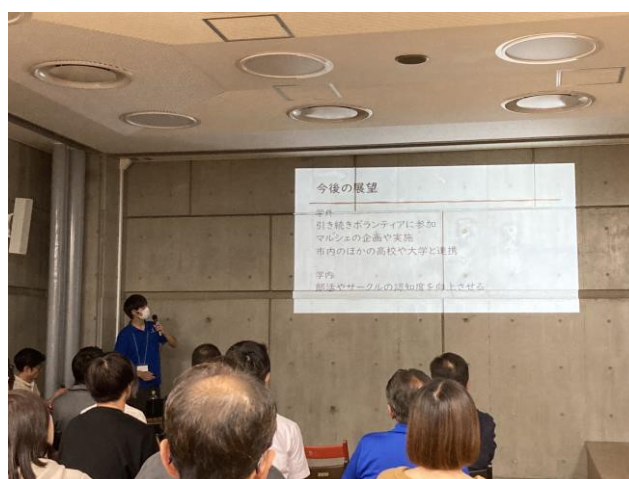


写真1 本学での我孫子100人カイギの開催風景
(ここでは鎌手が地域連携カイギを代表し登壇している)

(2) 「AKB (我孫子北口美化委員会)」との協働

他方で、100人カイギのように「地域活性化につながるようなきっかけを作る」ものではなく、直接的にイベントの企画・運営を行った取り組みもある。それが「我孫子北口ふれあいマルシェ」の開催である。この企画は、「我孫子北口美化委員会(通称:AKB)」から相談を受けて実現したものである。こちらは以前から我孫子の地域活動の担い手として、我孫子駅北口周辺の美化活動を通じてまちづくりを行ってきた団体である。今回は、その駅前周辺を用いて住民や駅の利用者が交流できる催しはないだろうか、という相談を受けた。協議を重ねた結果、AKBは駅前ロータリーで花壇に花を植える活動を行い、我々はマルシェ開催の準備に着手することとなった。

我孫子市役所には、我孫子市の地域経済活性化と、地域住民同士の交流の機会増進を目的としてマルシェの開催を提案し、駅付近の公園の使用許諾を得ることができた。当日は、地元の野菜を扱う直売店やお菓子店、障害を抱える女性たちが商品を製作している雑貨販売店が出展し、さらに本学から有志の学生を募り、焼き鳥・熊の肉を用いた鍋の提供や、

我孫子を含む東葛地域で活躍するラグビーチームによるタックル体験会が実施された。



写真2 当日のマルシェの様子

ここで我々は、学生が地域活動の担い手としてどう思われているかを検証するため、来場者に対して本学の学生や地域連携カイギの取り組みなどに関するアンケート調査を実施した。回答への協力を得られたのは20名と少なかったが、貴重な意見が得られた。例えば、「我孫子の活性化に必要なことは何か？」という問いには、「若い人々との交流」「公校民の連携」などの回答があった。また、こうした企画を継続的に求める声も多く、理由としては「若者たちが街を盛り上げてくれるのが嬉しいから」「学生の取り組みに協力したい」などが寄せられた。母数の少なさは否めないものの、学生による地域活動に協力的であり、歓迎するような反応が見られた。

今回の企画は継続的な取り組みにするためのテスト企画であるため、他のマルシェと比較すれば小規模なものであった。また、当日は天候が悪く気温も著しく低下した日であるなど、市民同士の交流には向かない条件が重なった。ところが、当日の来場者は200名を超え、地元住民や駅を利用する高校生、AKBの美化活動の参加者などが、マルシェの会場で町の課題や将来についてディスカッションする場面も見られ、企画で実現したいと考えていた風景を形作っていた。アンケート調査の結果にもみられる通り、学生を主体とした地域交流は、地域の住民が思い描く地域活動の発展に求められているのである。

4 終わりに ～学生が地域活動を担う諸課題と展望～

本稿では、地域活動の担い手の高齢化、人手不足という問題に対して、「大学で学んだ専門知を活かせる」ことと、「学生の入学によって大学という機関が若い」とことから、地域活動の担い手としての大学生の適格性を指摘した。そして、実際に学生サークルとい

う形で異なる2つの担い手と協働して企画・運営を行い、その有用性について述べた。

しかしながら、この試みはまだ走り出したばかりであり、今後の課題となる点も多々挙げられる。1つは地域連携カイギの知名度が低いことである。前述のアンケートでは、地域連携カイギの活動を知っていたかどうかについても調査を行った。そこでは、20名中10名が、マルシェに参加するまで我々の活動を知らなかったと答えた。これについては、市内のボランティア活動やイベントに精力的に参加し、地域住民の信頼を得ることが必要であろう。もう1つは、この学生による地域活動を、どのようにして下級生に継承していくかということである。2023年12月現在、20名以上の会員がこのサークルに所属しているが、企画の運営の中核に携わっているのは、創設時のメンバーである5名のみである。コロナ禍によって多くの学生が活動を制限されていた中で、このような取り組みに触れるのは初めてであるゆえ、どのように活動すればよいかわからない、というのが活動に二の足を踏んでいる理由であると考えられる。だが、創設に関わった5名を含むメンバーの大半は3年生で、就職活動を控えている。それゆえ現場を離れた際に、経験のない下級生だけが取り残され、安定したサークル活動が行われなくなる恐れもある。今後は、地域との関わり方のノウハウを伝えることにも注力していきたい。

とはいえ、このような課題を抱えつつも、地域連携カイギが「学生による地域活動の担い手」になることが期待されているのは、これまでの取り組みで明らかである。今後の活動では、他大学や小中学校、高校との連携も密にして、我孫子のみならず全体に学生が担う自治を届けたい。

【参考文献リスト】

- ・〔1〕総務省（2022）「令和3年度地域運営組織の形成及び持続的な運営に関する調査研究事業報告書（概要版）」『総務省ホームページ』
URL：https://www.soumu.go.jp/main_content/000820862.pdf
最終閲覧日：2023年11月24日
- ・〔2〕堂目卓生ほか（2022）『やっかいな問題はみんなで解く』世界思想社 pp.15~16
- ・〔3〕須賀由紀子（2018）「地域活性と持続可能な大学と地域の連携 ～都市と農村をつなぐ活動において～」『実践女子大学 学術機関リポジトリ（生活科学部紀要第55号 pp.53~62）』
URL：<https://jissen.repo.nii.ac.jp/records/2541>
最終閲覧日：2023年11月24日